

できなくとも
いいんだよ



今年も「ありがとうマルシェ」を開催することができました。3年目になります。震災後からずっとわたしたちを受け入れてくれる米沢市の皆さん、支えてくれる保護者、ボランティア皆さんへの感謝と、ちゃっかりたけの子の宣伝を兼ねての開催です。2日間で総数260名の方々においでいただき、自然の中で繰り広げられる数々のイベントを満喫していただけたのではないのでしょうか。

今回は、その中で気になったというか、前々からスタッフで話し合ってきたことなのですが、ツリーハウスの使い方について書こうと思います。

米沢市上新田の活動地には北側に大きなツリーハウスがあります。スタッフの志賀を中心に、試行錯誤を繰り返し、皆で力を合わせて作り上げてきたものです。未だに追加作業が続いており、これからも創意工夫で変化していくことでしょう。

高いところには登ってみたい、登らせてみたいもので、登る力がまだ備わっていないのに、手を貸してしまう大人、道具を使ってしまう子どもが後を絶ちません。

しかし、このツリーハウスは、わざと簡単には登れないようにしてあります。それにはいくつか理由があるのです。

・道具（いすや台など）を使って登ると、高さの認識がなくなるので危険である。
・自分の力で登れる子が安全に降りれる子。登れない子はまだその力（体力）が備わっていない。

い。それを待つことの大切さを知る。
・自分の力でできた時に味わえる達成感を子どもに得て欲しい。
・できなくて悔しい、また挑戦しようとする気持ちを育てる。

・できる子に対するあこがれ、尊敬を生む
・できないことがあってもいいのだということ
を大人も子どもも心と体の両方でわかる。

ひよいと登らせてしまうことは、子どもが自分でできた時の達成感を大人が奪ってしまうのではないかとさえ思います。その時は子どもはニコニコうれしそうにするでしょうが、困難があった時、すぐに人に頼ろうとするようになってしまいはしないかと危惧します。

もちろん、本当に困った時は手を貸します。できなことを助け合うことは大切です。

おもちゃの片づけの時、小さい子は自分で出したものを片づけられないことが多いです。出しっぱなしのおもちゃや道具はどうなってしまうのでしょうか。わたし達は子どもたちに大切にされていらないものは必要のないものと判断し、文字通り「お蔵入り」にします。実際そういうことが過去にも何度かあり、自転車の数が減っていったり、スコップが静かに姿を消したりしました。子どもたちは何度も言われていたことなので、文句はいいません。その代わり、片づけは本気でします。

「わたしは（ボクは）つかってない」と言います。そうです。すよね、わかっています。でも、じゃあ、片付けていいんだよね。というと、



年少女児が挑戦中

自分たちが困るから、最終的に大きい子が片づけをします。自分たちもそうやって、大きい子たちにお世話になってきたのです。それがたけの子の文化になっていきます。

他の子の分も片づけられるようになるということが心身共に大きくなったということではないかと思えます。実年齢は関係ありません。見ていると、得意なところを片付けているようです。それもまたいいのかなと思います。できることをして、お互いに助け合う。そのことを身につけていってほしいと思います。

人間は得意なことと不得意なことがあって当たり前で、それを活かしながら補い合いながら社会は成り立っていると思うのです。そうあって欲しいという願いも込めて。

今できないことがあってもいい。大きくなればできるようになると信じて子どもを見守る。もしかしたら、ずっと不得意なことがあってもいい。お互いの違いを受け入れられる社会を幼児期に体感して欲しいです。 辺見妙子

寄付や支援をいただいた方々 順不同 9月

支援金 渡部鋭幸様（紙芝居も頂きました）

佐藤貴志子様

つくる（ミサコ）ローリツェン様（8月）

ジルボム啓子様

おもちゃ から・ころセンター様

ボランティア 8月・9月

細谷洋一様

三沢季沙様、渡邊聖奈様、福田真一様

生熊彩香様、高橋菜々子様、高橋京果様

土田彩華様、志田千紘様、小林央奈様

岡部史織様、川口悠様、高橋宏義様

早坂昭慶様、槌谷明日香様、五十嵐あゆみ様

